

和歌山県

埋蔵文化財情報

1979. 5月 No. 14

1. 鳴神地区発掘調査速報 その1 P 1
2. 山崎山古墳群緊急調査の概要 P 2～10



社団法人
和歌山県文化財研究会

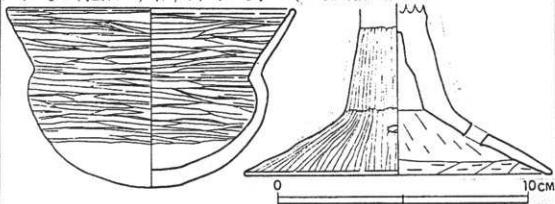
鳴神地区発掘調査速報 その1

昨年度のR24バイパス関連事業鳴神地区発掘調査は、M・N・J・I区の調査をもって終了しました。調査成果は、現在作成作業の段階にある『調査概報』、さらには『報告書』で一括報告させていただきます。今回はI区の調査結果の概略と速報します。

I区は巾8m、長さ60mの調査範囲で、古墳時代の遺構を主体とし、溝、河道、ピット等が検出され、その他の時期として、中世の溝が調査区を「く」の字形にのびた状態で確認できました。それらの遺構に伴って、須恵器、土師器、土鍾、瓦器、磁器等の遺物がコンテナで20箱程の出土をみました。

以下は、河道で出土をみた遺物についてそのほんの一部の紹介です。河道は、調査区をほぼ南北によさる巾6m、河底巾1.5m、深さ1.2m程の規模のもので、川底に堆積した砂層から、いわゆる布留式土器に含まれる高杯・甕・壺・小型丸底土器・鉢等が出土しました。なおまだ遺物の整理作業が進んでいない段階で、第1図の土器は川底の砂層から出土した遺物の一部分です。

小型丸底土器(第1図1)はやや扁平気味で体部から上方に開く口縁部をもつもので、口縁端部は内側に少し肥厚し、口縁部、体部内外面とも入念な横方向のヘラみがきにより仕上げられて、体部底内外面はナゲられている。淡褐色を呈し、胎土精良で良質である。高杯(第1図2)は、脚部で、やや小くらみ気味の柱状部から下方へ広がる裾部をもち、外面はたてのヘラみがきが柱状部から裾部にかけて施されている。内面はヘラ削りされている。(三宅正浩)



山崎山古墳群緊急調査の概要

1. はじめに

昭和52年、本県教育委員会は知辯学園中・高等学校建設用地造成にさきだち前方後円墳1基を含む6基の古墳の発掘調査を実施した。しかし学校用地外となった古墳の調査については種々の情況から実施出来なかつた。たゞの昭和52年度国庫補助金の交付を受けて当古墳群の保存資料作成のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、山崎山6, 8, 9, 10, 12号墳の5基を予定していたが、8号墳に隣接する1基の古墳と古墳があったと伝えられる1ヶ所の発掘調査を実施した。

2. 位置

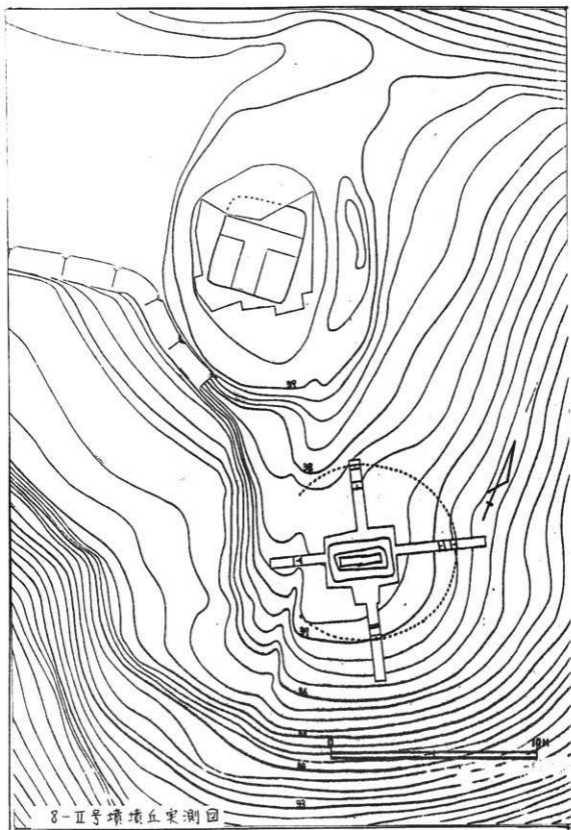
山崎山古墳群が所在する丘陵は、地元では山崎山あるいは根美山と呼ばれており、頂上線を境として北側は和歌山市、南側は海南市となっている。海南市側に広がる平野部には弥生時代の岡村遺跡が所在する。この他周辺には横穴式石室と内部主体とする室山古墳群、山崎山の南東の低丘陵にある八幡宮古墳群があるが、いずれも敷基からなる古墳群である。

3. 各古墳の調査

・6号墳——終戦後すぐに開墾され、現在は蜜柑畑になっている。開墾前は現状より約1m程高く、中央に大きな塚があいており、開墾に際しそれを埋めて蜜柑畑にしたといわれている。

発掘調査は墳丘のほぼ中央に幅1m、長さ5mの東西方向のトレンチとこれに直交するトレンチを設定し、掘り方検出に伴い拡張した。調査の結果、幅2.9m、深さ約1.2mの岩盤層を掘り込んだ掘り方を検出した。南側が作業用のモノレールが敷設されて調査ができなかつたが、掘り方の規模からみて横穴式石室と考えられる。主体部内の調査範囲はわずかにあったが、東側壁がわずかに遺存しているのみであった。床面には敷石が部分的に遺っており、この部分から碧玉製管玉、ガラス製丸玉、鉄器片等が出土している。

・8号墳——低い墳丘状の高まりをもち、蜜柑畑として開墾され墳頂部は平坦に



8-II号墳丘実測図

なっている。調査は南北方向のトレンチを設定したが、トレンチ内において幅約4mの地山層を掘り込んだ掘り方を検出したのでトレンチを拡張したところ4m×5m、深さ約0.5mの掘り方を検出した。掘り方内の調査はトレンチにより埋葬主体の構造を確認したが、覆土中から片岩、埴輪片が出土したのみで石積み等の遺構がみつからず、底部から丸木杭に5寸釘を打ちつけたものが出土した。

・8-II号墳 —

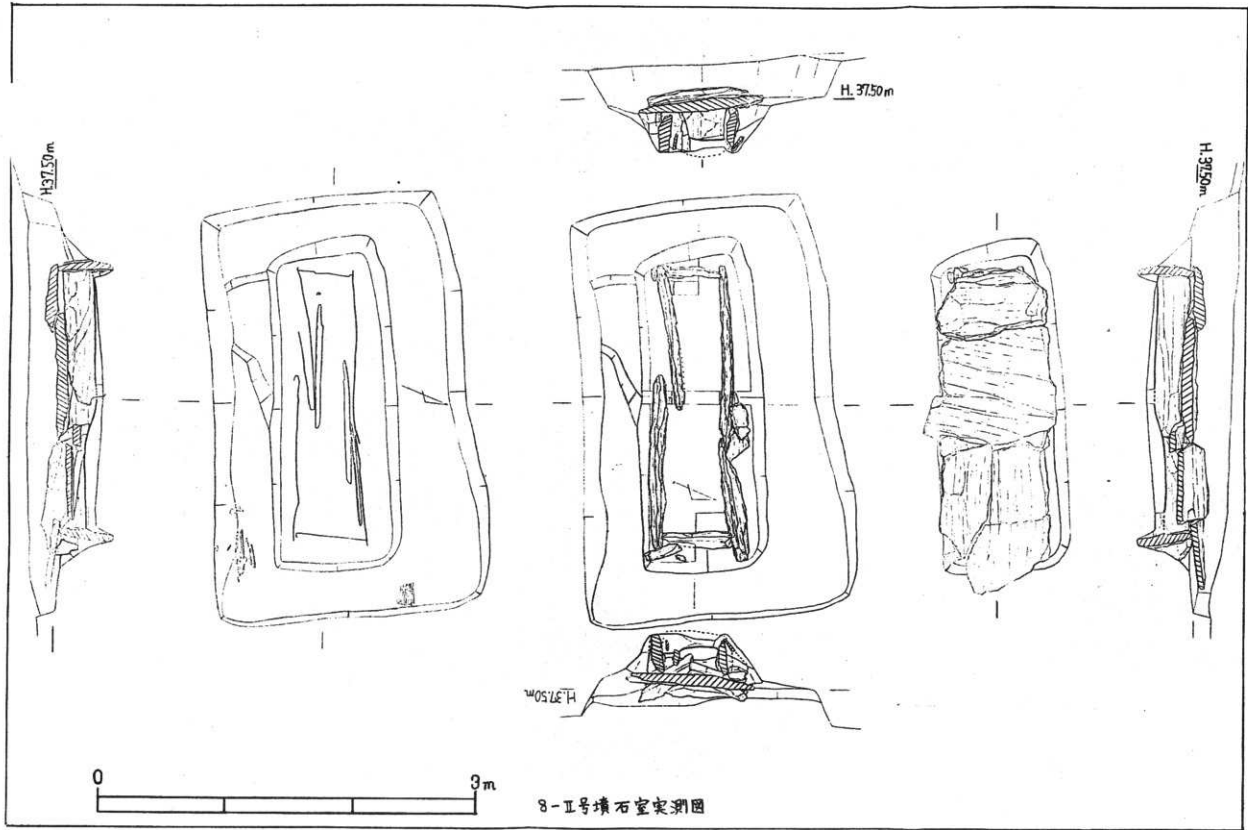
1. 位置 山崎山古墳群は、すでに宅造工事、土取り工事等によりいくつかの古墳が消滅しており、さらに昭和52年度に行なわれた智辯学園建設工事により前方後円墳を含む基の古墳が破壊され、山崎山塊自体も大きく変容してしまっている。かつての古墳群を復元する^(註1)すべもないが山崎山第8-II号古墳は第3号墳地点より南に分岐する古状の尾根の先端、標高約37mのややフラットになった地点に位置する内部主体に箱式石棺を持つ径約9mの小円墳である。ちなみに尾根の分岐点第3号古墳地点より西方にのびる尾根にはやはり箱式石棺をもつ第2号古墳がかつては存在した。^{註2}

2. 墳丘及び外部施設 封土の流出はかなりの量にせよ本古墳の封土は本来あまり顕著なものではなかったと思われ、地山寄せの墳丘をトレンチにおいて約0.2mの厚さで認めただけである。

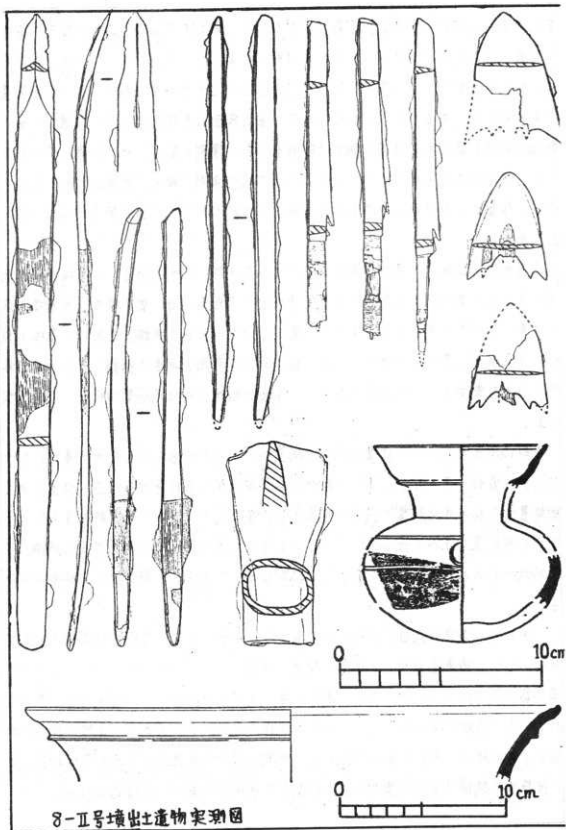
墳丘の西側約1/4は削平を受けているが、南、北、東トレンチでそれぞれ幅約1.2m、深さ約0.15mの地山整形溝を検出し、本古墳の規模を確認した。地山整形溝より墳頂部までの高さ約1.2mを測る。昇下の古墳の多くは、こうした地山の整形溝を尾根側に「馬蹄形」にのぐら可のと通例とするが、本古墳においては全周させている数少ない例である。

3. 内部主体 墳丘のほぼ中心の地山を長さ約3.1m、幅2.1m、深さ0.3mの方形に掘り下げ、さらに石棺を置くため、長さ2.45m、幅0.94m、深さ0.3mの二段の掘り方を行なっている。

^{註3}
箱式石棺は扁平な結晶片岩を組み合わせたもので、左右2枚ずつの長側石で小口石



8-II号墳石室実測图



をはさみ込んで作っている。側石、小口石とも、地山を5cm程の深さに間尺に合うだけ掘り込んで立てられ、いわゆる「四周とも扉立」の状態となっている。天井石は三枚の石を東から順に置いており、北側石のつなぎ目の低い部分には小割石と置き天井石をささえるもくろみがなされている。床面は赤褐色土をしいた後、1cm〜数cmの円礫を混じえる非常に細かい砂利をしき、東側が高く、わりには雑に作られている。側石は土圧で押されているが、内法で短辺東側0.44m。西側0.37m。長辺1.95m。床面から天井石までの高さ0.25m。とそれぞれはかり、主軸方向はN-22°Eである。

4. 遺物の出土状況と遺物 遺物の出土は以下4群に大別し得る。A.墓壇埋土上面及びそこから流出したと思われる表土層検出の須恵器、碌、甕の破片。B.墓壇1段目の東、北側で刃先をすべて東向きに置いた18本の尖根の鉄鍔。C.同じく墓壇1段目、東、南側に置かれた鉄斧、のみ、鉋、等の工具類と平根の鉄鍔、刀子。D.石棺内の刃先を東向きにした三振の直刀と、床面西側検出の紅瑪瑙製の勾玉とガラス製小玉。

A群の須恵器については墳丘部分の調査がトレンチに限られるため、量的にも少なく断片資料にすぎない。またC群の工具類等に関しては現地表に近い位置にあり樹勢豊かな松の木の影響や、根を除去する作業のため、その一部を紛失するなど必ずしも現位置をすべて保っているとはいえない。遺物のうちB群の刀子状鉄鍔は百墳時代のものとしては類別を聞かない特異なものである。C群の鉄条は鑄造品である。
註5

5. まとの 本墳は乱掘をまぬがれた数少ない百墳であり、豊富な鉄器類の出土を見た。しかし須恵器資料にはしく築造の時期にはわかに決りがたいが、出土した須恵器がいずれもきわめて古式に属する事、通常5世紀中頃より普及すると考えられている。莖線部分の長い、いわゆる長頸鍔が見られない事から、本墳の築造の時期を5世紀後半、それもあまり遅くない時期において大過ないものと思われる。また被葬者の頭位は棺内の遺物の出土状態より西向きであったと考えられる。

註1 — 経過と顛末については『埋文情報』に詳しい。

註2 — 大成高等学校郷土部「山崎山第2号古墳発掘調査概報」1976

なお、本報告では、攪乱が著しく断定し得ないが、第2号古墳には横穴式石室のあった可能性が述べられている。

註3 — 掘り方が二段にわたる箱式石棺は、最近の調査例では大谷山99号墳の例があり、古さに至っては「岩橋千塚1」に17号、50号、81号、100号古墳の例があげられ、うち100号墳は外郭構造をもつ特異なもので、二段の掘り方との関連で非常に示唆的なものである。

和歌山県教育委員会「大谷山4、5、6、99号古墳発掘調査概報」1972

和歌山県「和歌山県史蹟調査報告1 岩橋千塚」大正10年

註4 — 遺存状態がわるく内容は判明しないが、最近の調査例では山崎山3号墳に同様の「扉立状態」が見られる。

和歌山県教育委員会「山崎山古墳群緊急発掘調査報告」1978

また岩橋千塚17号、50号、81号、100号古墳(前掲書)も同じ状態のものと思われる。

なお蛇足ながら扉立工法は、小口の基礎石に限り、6世紀代の小規模な竪穴式石室にも見られる。

「山崎山古墳群緊急発掘調査」出稿

註5 — 河出書房「日本の考古学」古墳時代・下「武器」の項(西川宏氏)に岡山県旗振台出土として、刀子状の鉄剣が紹介されているが、本墳出土のものとは腸状の部分全く異なり、旗振台の方がより刀子に近い。

・9号墳 — 現在、北側は雑木林、南側は蜜柑畑として開墾されている。墳丘上と東西に市境いがあり、これに沿って幅1m、長さ約7mのトレンチを設定し、調査したが遺構は何等検出されなかった。蜜柑畑の所有者によれば、大正頃に開墾した際に石室や土器が出土したということであった。

・10号墳 — 現在、蜜柑畑として開墾されており、かつて坊主山と呼ばれ、草・

木等にはなかつたという。墳頂らしいところに南北方向にトレンチを設定したが、0.5m程で岩盤に達し遺構・遺物の検出はなく古墳となつた可能性が高い。

・12号墳——調査前は雑木林と一部畑に開墾されていた。開墾は昭和4～5年頃に行われ、岩盤を削りとして畑としており、この断面に周濠が明瞭にのこっており、径約15mの円墳と考えられる。

主体部は岩盤層を二段に掘り込んだ基壇に蓋石を架構し、砕石と土で覆っていた。主体部の西側には蓋掘により旧状を保っていたが、東側は蓋石が少し落下込んでいた程度で副葬品には旧状を保っているようであった。

副葬品は蓋石上に須恵器蓋坏(3組)、土師器壺1点が、基壇内から須恵器、提瓶、短頸壺、蓋坏(2組)、土師器壺の出土があった。基壇内の攪乱土内からは円筒埴輪片が出土しているが、墳丘を設定したトレンチ内では旧状を保った埴輪は出土しなかった。築造年代は副葬品からみて5世紀末乃至6世紀初葉と考えられる。

4. おわりに

今回の調査は7地点の調査を実施したが、そのうち主体部を確認できたのは6号墳、8-II号墳、12号墳の3基であった。現在のところ6号墳の築造年代を決める手がかりはないが、他の古墳との関係から6世紀前半に築造されたと推定される。12号墳の主体部である岩盤掘り込みの基壇は昭和52年に調査した前方後円墳山崎山5号墳と同様のものでその関係が注目される。

なお、主体部を検出した3基の古墳はいずれも埋めもどしを行ない調査前の状態に復した。このうち箱式石棺を主体部とした山崎山8-II号墳は丹有地内に所在するため整備を行なうよう当局と協議中である。(松田 但8-II号墳-武内)

《編集後記》真夏目のような暑さが続く毎日、ツレバテ美味ですが、昭和54年度分第2冊目が出来上がりました。本号は昨年度調査した鳴神遺跡と山崎山古墳群の概要とのせることが出来ました。山崎山古墳群は昭和51年度に調査した第5号墳等と一連のもので、銅剣あるいは古式須恵器等出土しており、紀北古墳文化における極めて重要な遺跡であると思われます。(宇野)